

審査の結果の要旨

氏名 早川 正祐

早川正祐氏の論文「ケアと行為者性の哲学―揺れ動くものとしてのケアと行為者性―」は、現代の行為論そして行為者性をめぐる議論に関して、これまでの意図や欲求によるアプローチに代わり、「ケア」の概念を導入する新しい潮流の検討を通じて、行為者性を解明する新機軸を展開しようとする試みである。全編を通じて、「ケア」と目される現象の中での、「気にかかる」という受動的様態をハイライトし、そうした様態を通じて動的に生成してくる、個人を越えた関係性に、行為者性あるいは「その人らしさ」のありかを見届ける、という構成になっている。

早川氏は、まず第1章において、従来の行為論・行為者性論が「意図」の概念を中心に展開されてきたことを押さえた上で、それに代わる「ケア・アプローチ」の基本的枠組みを整理する。それは、「気にかかる／気にかける／大切に思う」という三分区に基づく。なかでも早川氏は、見過ごされがちであった「気にかかる」という受動的様態の重要性に注目する。しかも、こうした注目は、医療や福祉といった、道徳的配慮に関わる分野に限定されずに行われるべきだ、と論じられる。続いて第二章において、「気にかかる」という受動的様態の詳しい分析が遂行される。まず、なにゆえ従来のケア理論では、「大切に思う」という様態のみが偏重的に扱われたのか、という問いが立てられ、それは、通時的な行為者のありようを明らかにする、という目論見があったがゆえである、と分析される。しかるに、通時的な行為者性というのは、実は変化に富んだ豊かなものであり、その動的な実相を捉えるには、「気にかかる」という受動的様態への視線が必要である。「気にかかる」という様態は、主体を動揺させるような未知の要素に対するアクセスを備えているからである。次に第三章では、「ケア・アプローチ」の代表的論者であるフランクファートの、意欲に基づくケア理論が批判的に検討される。まず、フランクファートの議論の根底には、意欲の統合性を「その人らしさ」と捉えるという発想があることが暴かれる。しかるに、そうした発想では、「気にかかる」という様態の中で発生する「葛藤」というありようが見失われる。行為者の「その人らしさ」は、「葛藤」の中で動揺していくさまにこそ見届けられるはずだ、と論じられる。最後に第四章では、以上に検討した「ケア・アプローチ」が、従来の「意図アプローチ」に対してどのように意義をもつか、ブラットマンの議論の検討を通じて明らかにされる。ブラットマンの重視する「計画」の様態は、再考慮に抵抗するという傾向性をもつが、再考慮をむしろ促す、「気にかかる」を射程に入れた「ケア・アプローチ」を導入することで、ブラットマン流の「意図アプローチ」が補完され、関係性の中でゆらぎながら生成してくる、通時的な行為者性の記述が充実する、と結ばれる。

以上の早川氏の議論は、「嫌悪」のようなネガティブな「気にかかる」をどう解するかといった点などの説明が不足しているとはいえ、行為論・行為者性論の新機軸を大胆に開拓する充実した論考であり、博士（文学）の学位に十分に値すると判断される。